

ですから、それぞれの孵化する時期というものもあるし、ファンタジーでもあると思うのですが、デンマークでもそういう作業をしてみた結果、土手を作って囲うという事がすごく大事なことでした。この学校でも考えてみてください。いま、私たちはこの教室で囲われているわけです。それから、周りの緑でも囲われています。(会場、拍手)

## 講演「子どもの遊び場を支えるプレイリーダー論②」

### 内藤裕子氏

まちとこどもの環境研究所代表、  
NPO法人子どもと文化協議会・  
プラッツ理事



今日は皆さんからご希望のあった子どもの遊びのプログラムの紹介をスライドでお見せします。最初にお見せするのは私が見学に行きましたミュンヘンの子どもの遊びの活動です。また、私が地元立川でやっていますプラッツ（NPO法人）の活動と、私の会社のまちとこどもの環境研究所が請け負っている活動も見ていただいて、みなさんに色々お伝えしたいと思います。

(以下、スライドを見せながら)

#### ◆ミュンヘンの地域への遊びの出前「プレイバス」◆

まず最初はミュンヘンの遊びの活動からご紹介したいと思います。これはミュンヘンだけではないのですが、ヨーロッパにはプレイバスという活動がありまして、遊びの出前をするんですね。ある会場に来てくださいというとかかなり無理のある人がいるんですね。遠くに行けなかったり、交通費が難しかったり、小さい子がいて難しかったりするんで、ミュンヘンでは子どものいる地域に直接でかける遊びの出前を10年以上前から始めています。

#### ●インディアン村の実践

インディアン村というのは子ども達が公園の中でインディアンの体験を3週間実践していました。私が行った時はちょうどその3週間の真ん中あたりなんですけれど、このポスターが（ポスターの写真を見せて）街の中に貼られていまして、広い公園などを借りて遊びが展開されます。遊びの出前はバスに遊び道具を積んで

行くんですね。色々な公園や広場に出かけます。このインディアン村というのは3週間やっています、最初の1、2日は子どもたちが博物館に行ってインディアンがどういう生活をしているかキュレーターからお聞きし、話を聞いてから、今度はそれを自分たちが体験してみようということで、次の日から3週間インディアン遊びの実践が始まります。毎日色々なプログラムがありまして、インディアンの衣装を作ってみたり、機織をやってみたり、色々な生活用具を作っているのを体験してみたり、皮に絵を描くアートを体験してみたり、食べ物を作ってみたり。

ミュンヘンは私が行った当時は小学校の授業が午前中しかなくて午後は地域の時間になっていまして、その地域の時間の中で色々な人やグループが遊びを提供していました。で、これはその中のプログラムのひとつです。年齢も色々な子がいまして実際大人がしかけたプログラムの中に入らない子もいるんですね。そういう子は好きなことができるのですが、ちょっと歳のいった子は、今日は公園の中で何が行われているのかを書いて、新聞を作って配っていたりとか、自分で遊びのプログラムを見つけることもできるようになっています。ここは3週間で大規模だったものですから、市民会議場や、銀行を作りまして、実際その時代の街の機能を体験できるようになっています。市民ホールではみんなが街のことについて話し合うのに利用したり、銀行だとお金を作ったりとか流通させたりなどいろんな体験をしています。ここはシアターもありまして、その時代のあるお話を持ってきて大人と一緒に子どもたちが練習して劇を演じます。そしてまたそこに観に来る子もいるという、こういった形で3週間色々な方面からインディアンの生活を知りながら体験して遊んでいます。これがひとつの遊びの出前のプレイバスの事業です。



インディアン村全景・ミュンヘンの公園

#### ●ネットワークして活動する

遊びの出前を行うプレイバスはインディアン村だけ

ではなく、色々な種類があります。インディアン村をやっているグループは幌馬車を持っているグループとジョイントしたり、馬を持っているグループとジョイントしたりとか、色々なところとネットワークを組みながらお互いの遊びの活動を膨らませています。「シュピールモービル」とドイツでは言っているんですけども、遊びのバスですね。バスは種類があります。これは美術館バスですが、インディアンの生活を体験するために、美術品や生活用品をバスの中に展示しています。これらの作品は子どもたちで作ったものもあれば博物館から借りてきたものもあります。こういった形で環境教育的な要素も入れながら、描いたり作ったりという想像的な遊びも入れながら、色々な方面から体験できる活動をしていたのがインディアン村でした。

プレイバスという遊びの出前の他に、このグループは子どものためのミュージアム「キンダーミュゼオ」もやっています。ミュージアムの中で子ども達が集まって遊びをしたり、工房もありましてここで色々なものを作ったりもします。スタッフのような形で小遣いももらったりして子どもたちが実際にスタッフとして運営に関わるという形もありました。

### ●プレイバスの背景

先ほどもいいましたがプレイバスには色々な種類があり、ミュンヘンのグループはバスを6、7台持っています。ドイツの中には色々な街のグループが持っていて、ドイツだけではなくてロンドンにあったり、ローマにあったり、ヨーロッパの街では子どもの遊びの出前というのが色々な機関で行われています。96年に見に行った時に写真だと思のですが、その頃になんでこういうことをしたかをグループリーダーが語ってくれました。街が危なくなってきたり、親たちが子どもを外に出すのが出来なくなりました。子どもたちは外に出られないのでビデオを見る。そういった悪い状況になってしまい、外で安全に遊ぶことが出来ない。だから自分たちは遊びの出前を地域にして、地域の安全な空間の中で、創造的な遊びが出来るようにするんだと。

バスの材料が置いてある倉庫としては、ホールのような大きなところを使っています。ここからバスに遊び道具を積んで地域にでかけています。ミュンヘンではこのプレイバスの活動が夏は毎日、春と秋は土日という形で運営されています。冬は寒いのであまりやらないのですけれど、こういう形でほとんど毎日のように夏は遊びが行われています。

### ◆NPO子どもと文化協議会プラッツ(立川キッズ)の活動◆

私は、日本でもぜひこんなことをしたいなということで仲間たちと1993年にグループを作って遊びの活動を始めました。

### ●立川での遊びの出前「プレイバス」

プレイバスは2000年に多摩川の河川敷で行いました。「作る感じる遊びの王国 プレイバスがやってくる」というかたちでスタートしました。ミュンヘンのプレイバスに比べると規模は小さくて、たった1日だったのですが、できるところからやっていけばいいじゃないかと思うんですね。これは5月だったので「こいのぼり人間になっちゃおう」という題名にしまして、子ども達が、先週のワークショップで皆さんが絵の具で遊んだように、絵の具にまみれながら、こいのぼりの絵を服のように大きく描いて、それを着て自分がこいのぼり人間になっちゃう、そういう遊びをしました。沢山のボランティアの方に協力してもらい、立川市の社会福祉協議会の方にボランティアを集めていただいたり、色々なネットワークを使いながらやりました。で、こういう形でプレイバスを色々なところでやったんですね。これは立川市の富士見町のある公園なんですけど、ここでは「七夕人間になっちゃおう」という題名にしてやったんです。で、実はこれは学芸大の学生たちがかなり参加しました。私はプロジェクト学習を何年か担当していたので、2年生の後期の時にプレイバスに参加していただきまして、一緒に色々なアート体験をしていただきました。地元の子供達が地域の公園で3時間ぐらい楽しく遊ぶという企画を作り実践しました。



遊びの出前プレイバスの基地

### ●ジャングルトレイン(国営昭和記念公園園・夢プラン)

これはまた別の企画なのですが、昭和記念公園にある乗物パークトレインをジャングルトレインという名前にしてみんなで車体の回りに絵を描いて走らせて乗っちゃおうという企画をしました。直接絵を描けないの

でダンボールに絵を描いて、それを貼っています。子ども達はお面を作ったりしてかぶりながら公園の中を走り回るといふ、企画をやってみました。これはちょっと大規模ですけど、昭和記念公園の地底の泉という広い場所で、ボランティアが5、60人、それも色々なグループとネットワークをして、演劇のグループの人、音楽のグループの人、それからうちのNPOの立川キッズのメンバー、または地元のボランティアの方たちということで、公園に来た子ども達を対象に、作ったり、歌ったり、踊ったり、というのを丸一日繰り返しています。

### ●成長するアート・柳のワークショップ

これはまた系統の違ったもので、昭和記念公園の子ども達の森の奥に1995、6年前かな、柳を使って造形物を作りました。これは2月ぐらいの寒い時にやったんですけど、みんなが植えているのは柳の枝なんです。1本1本挿し木にして設計通りに挿して作っていきます。2月なので猫柳の花がちょっと出てくるくらいかな、こういう柳の枝を挿し木をして色々な形を作りました。これはイギリス人のランドスケープアーキテクトの方をお呼びしてやったものに私が参加したものです。こちらの写真が何ヶ月か経ったもので、実はこれ「成長するアート」と呼んでいまして、挿し木にすると、根が張って伸びてきてだんだん植物が青々と成長してきます。作ったものがだんだん成長して緑になって、ジャングルようになって、また枯れていってという成長するアートですね。子ども達とやるとけっこう感動があるかと思っています。

### ●公園の中でのワークショップ（昭和記念公園・子どもの森わんぱくクラブ）

これは「額縁ワークショップ」。額縁を自分でダンボールで作って色を塗って公園の自然の中で自分がいいなと思った景色を切り取って自分で作った額に入れるというワークショップです。

これは、「染め織りワークショップ」。2、3時間で子ども達が染めと簡単な織りができるのです。公園の中から色が出そうな草花を採ってきて、それを煮て、その中に毛糸を漬け込んで色を染み込ませて、乾かしてから織るといふ。織るといっても枠の中に毛糸を編みこんでいくだけなんですけど。編むのは木の枝を折ってその枝に毛糸をくりつけて編みこみをしています。なるべく自然のものを使ったほうが面白いかなということをやりました。

### ●広がっていく活動の輪

これは丹後にある、ある公園の開園イベントです。将来子ども達がこの公園で遊んでもらえるように、好きになってもらえるように、ここでアートのことを繰り返し広げようということをやったものです。ここでは野染めというのをまずやりました。野っばらで染めるということで、野染めといいますけど、子ども達が色々な色を布に描いて、布を乾かして、衣装にするんですね。午前中に染めた布を着て午後はお面を作ってそれをかぶって、変身をしてこの公園の中で遊びます。この時も劇団と組みました。自分たちだけだとあまり広がらない活動も色々なグループとジョイントしてアイデアを出してもらおうと、音楽とか演劇とか色々な方に広がっていくと思います。最後には、子ども達と劇団のグループと一緒にこの公園の中で踊りながら行進をしました。

### ワークショップ「子どもの遊びの重要性体験」 内藤裕子氏・塚本純久氏 ～ネイチャー&アートで自分の感性を見つけよう～ ①

11月22日実施

#### ◆◆導入のお話：五感遊びの大切さ／30分ぐらい

スライド等使い、五感遊びの紹介（小峰公園（八王子）、昭和記念公園（立川）等のワークショップ）

===ネイチャー & アート 野外で五感を楽しむ===

#### ・自己紹介

子どもたちの遊びの手伝いをしている。

立川の昭和記念公園で月1～2回、子どもと「ネイチャー & アート」というテーマで自然の中でワークショップを実施している。

学生時代は、子どもの遊びの空間調査をしていた。

1995年、「立川キッズ」という自然の中でアートワークショップをするボランティアグループを結成。

現在では、NPO法人子どもと文化協議会プラッツに発展した。

アートワークショップのテーマ：「感性」

#### ・五感遊びの紹介

五感遊びとは→子どもたちの「感性」を豊かにし脳を活性化させる。

現代の子どもたちは、テレビゲーム等屋内で遊ぶ事が多く外で遊ばないため、脳の発達バランスがくずれて感情の抑制を行う前頭葉の働きが鈍いと言われている。よって、前頭葉を五感のバランスにより刺